

みんなの力でクラウドファンディング -集合知による地域活性化プロジェクト形成検証-

三井実 高橋正道 堀田竜士

富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 コミュニケーション技術研究所

はじめに

インターネット上の不特定多数の人から資金獲得する仕組みであるクラウドファンディングは、個人で行う小さな活動(プロジェクト)であっても、多くの人から活動資金や活動への賛同を得る方法として注目されている。日本におけるクラウドファンディングサービスには、Readyfor?, CAMPFIRE, motion gallery, ShootingStar 等あり、これら主要サービスで2014年8月時点の累積支援額はおよそ17億円である¹。支援額は、年々増加傾向であり、寄付や投資と違った新たな資金獲得方法となりつつある。

現在、われわれは岩手県遠野市や他地域で、地域の課題を解決する個人・コミュニティのつながりや行動を生み出す方法論を検証している²。この活動の中心は、社会起業家のような専門的な知識や、人的なネットワークを持っていない地域住民である。多様な人が集い、共に実現したい未来を描き、実現していくことで、地域課題解決を試みている。クラウドファンディングを活用することで、資金獲得・活動の社会的認知の広がり等から、地域課題解決を促進できると考えている。地域住民がクラウドファンディングを活用する上での課題として、技術的・心理的課題の2つに分類した。技術的障害としては、賛同し協力したいと思う魅力を持ったプロジェクト内容を作成すること、社会的有用性とオーナー個人の実行性を理解される表現をすること、適切な写真や動画といったコンテンツを揃えることなどが考えられる。また、心理的障害としては、投稿するという心理的ハードルを乗り越えられるかということ、資金獲得後のプロジェクトに対する責任を持てるかということ等が考えられる。これらの技術的、心理的障害を支援する事が出来れば、地域住民が主導する地域課題解決に必要な資金や仲間を日本や世界中から得る事が可能となる。

本報告では、集合的手法³により技術的障壁を解決するトライアルをまとめる。オーナー(1人)から支援者(6人)を介して、ワークショップ(39人)、クラウドソーシング(100人×5回)を活用した集合知によって、プロジェクトを深掘していく過程を報告する。

検証方法

本報告で実施したクラウドファンディングのプロジェクト生成過程を図1に示す。通常のクラウドファンディングサービスを利用した場合と比べると、プロジェクトオーナーによる投稿作業の前に、プロジェクトエントリー、プロジェクトの集合的支援の2つの

過程が増えることが違いとなる。



図1 プロジェクト生成過程

プロジェクトエントリーには、次の3つの資料提出を条件とした。
①プロジェクト内容を記載した1000文字程度のエントリーシート
②プロジェクトに関する写真30枚
③プロジェクトの思いをオーナーが語ったビデオ。

これら3つの資料をインプットとして、プロジェクトの集合的支援を行った。図2に、プロジェクトエントリーから、5つの集合的支援の流れを示す。各プログラムの概略を、表1に示す。

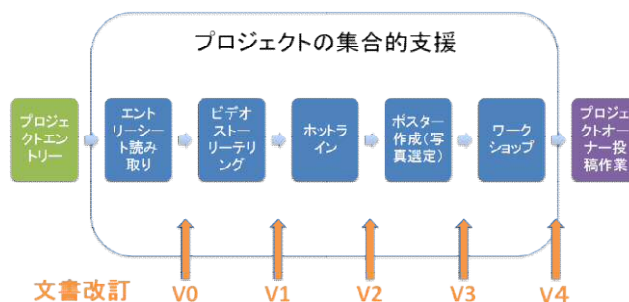


図2 プロジェクト集合的支援の流れ

表1 集合的支援概略

プログラム名	概要	目的
1. エントリーシート読み込み	エントリーシートを読み、全支援者で共有する	プロジェクト概要を理解する
2. ビデオストーリーテリング	プロジェクトにまつわる個人のストーリーを聞く	オーナーの思いを理解する
3. ホットライン	電話で支援者とオーナーが直接対話する	対話により思いと内容を深める
4. ポスター作成	文書・写真を合わせて、Webサイトのイメージを作る	投稿イメージを深める
5. ワークショップ	多くの視点を持った方々とプロジェクトへの内容・支援賛同について対話をする	多様な客観的視点を取り入れる

支援者は、すべてプロジェクトの内容やオーナーについての事前情報はなく、プロジェクトエントリーシートを読んだ時点で初めてプロジェクトについて知る。支援は6名(男性3名、女性3名)で行った。支援者は、大学生・大学院生であった。

5つの支援を終えたあと、1000文字程度の文字数で支援結果を文書で表現し、プロジェクトの向上を目指した。最終的に計5つのバージョンを作成した。各改訂作業は、6プロジェクトを6名全員で行った。時間は60分で行い、すべてのプロジェクトに

改訂が行われる事を条件とした。また、全員で各プロジェクトに関与し、プロジェクト毎の分担としないこととした。

各改訂文書はクラウドソーシングを使い評価した。クラウドが行う作業は、改訂文書を確認し5つの評価軸で5段階評価してもらった。このときのクラウド数は各回100とした。この回答を支援者がプロジェクトの質を判断する材料として提供した(V0の結果をV2作成前、V1・V2の結果をV3作成前、V3の結果をV4作成前)。大規模な人の意見を比較的簡単に収集できるクラウドソーシングによって、半日程度の時間で大規模な回答が得られる。支援者には、回答の平均値を簡易的な集計データとして提供した。また、すべての支援が終わった段階で、クラウドソーシングの回答を解析し、プロジェクトの質の変化を測定することを試みた。

集会的支援の狙い

集会的支援は、通常のオーナーが中心となった場合と比べいくつか特徴がある。①オーナーから支援者にプロジェクトが渡されること、②支援プロセスは常に6人以上の関与があること、③関与する集合の数が6から100まで変化することである。以下、各特徴に対する期待を説明する。

①エントリーシートをインプットとしたプロジェクトを支援者に渡すことによって、他者のフィルタを通り再記述される。これによって、プロジェクトの構成が他者に理解され、共感を得られる内容となると期待できる。エントリーシート読み込みによって支援者が概要を理解し、ビデオストーリーテリングによって支援者がオーナーの意図をより理解することを期待した。

②集会的対話を通じて、他者の多様な知識経験から、プロジェクトに対する疑問やアイデアが集まり、プロジェクトを深めることが期待できる。ホットラインでは、支援者の質問によってオーナーの意図やプロジェクトにまつわるストーリーの深堀を、ワークショップでは多様な参加者との対話により多様な視点からの深堀を期待した。また、クラウドソーシングの回答より、プロジェクトに関与していない多数の人から客観性の高い評価を期待した。

③1から100人という集合の数の違いによって、様々な視点が得られることを期待した。数が多くなるほど時間的な関与度は小さくなるが、多様な視点を得られる。小規模な6人では支援過程全体(数10時間)に深く関与することで、集約的な視点を期待した。中規模な39人では、数時間のワークショップを通して、多様な知識経験から多面的な視点を期待した。大規模な100人では、多数からの一般的な視点を期待した。

クラウドソーシング評価結果

クラウドソーシングによりプロジェクトの質の変化を評価した。改訂バージョン毎のクラウドソーシング回答の有意差評価をKruskal Wallis 検定により行った。このとき、5つの質問は区別

せず各改訂バージョンの標本として検定を行った。全プロジェクトを区別せずに、改訂バージョンによる検定を行った結果、漸近有意確率は0.000であった。このときの、平均ランクの改訂バージョンの変化を図3に示す。また、Ryan法による多重比較の結果を表2に示す。

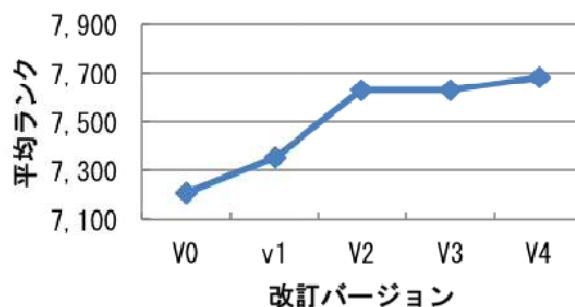


図3 平均ランクの改訂バージョンの変化

表2 バージョン間の有意差

比較バージョン	V0-V1	V1-V2	V2-V3	V3-V4
p値	0.428918	0.04466	7.34337	3.159115

考察と今後

V1-V2間でのみ5%の有意差がみられた。この変化は、ホットラインの直接対話によりプロジェクトが深堀されプロジェクトの質が高まったこと、V0のクラウドソーシング結果を参考にすることが効果的に文書表現に現れたと考えられる。

その他のバージョン間では有意な差は見られなかった。これらの原因は、支援プログラムが有効に機能していないこと、クラウドソーシング評価で有意性が見られない程度の変化であったことが考えられる。また、支援プログラムで多くの集合知を得ることはできたが、オーナーとの対話を経っていないため、改訂文書へ反映させられる材料を支援者が持っていなかったことで十分な文書表現に至らなかったとも考えられる。

集会的支援後のオーナーによるクラウドファンディング投稿とプロジェクト成立については、今後の検討を進める。

参考文献

- i <http://visualizing.info/cr/crowdfunding/jpmap/>
- ii “地域共創プロセスの設計と実践：大学生と地域住民によるお土産づくり”，涌井 美帆子、高橋 正道、堀田 竜士、青谷 実知代、地域活性研究 5, 443-449, 2014
- iii “クラウドソーシング×対話×フィールドワーク ～集合知を使った地域活性化策の抽出のトライアル実験～”，高橋 正道、三井 実、涌井 美帆子、堀田 竜士、GN Workshop 2013 論文集, 2013, 1-2